卒業生を訪ねる

Linuxを日本に広げたパイオニア
民族学からコンピュータの世界へ
小島三弘

総研大の一期生として「コンピュータ民族学」を研究するうちにLinuxに出会う。フリーソフトウェア作者の生態を文化人類学の視点から探ろうと、みずから日本語版Linuxを開発。「Linux ハッカー」(注1)と呼ばれるまでになった小島さんの「ミイラ取りがミイラになる」まで。

理系から文系へ

博士課程1年までは京都大学の理学部で自然人類学を研究していました。

明治時代の人骨標本を使って、その人たちの死亡年齢を推定する仕事です。歯の磨耗の仕方、頭蓋骨の癒着の具合などから、かなりよく年齢がわかります。そうしているうちに、この集団がどのように生きてどのように死んでいったのかに興味が出てきました。骨を測りながら、骨だけでは人が生きてきた過去はわからない、という気になったのです。

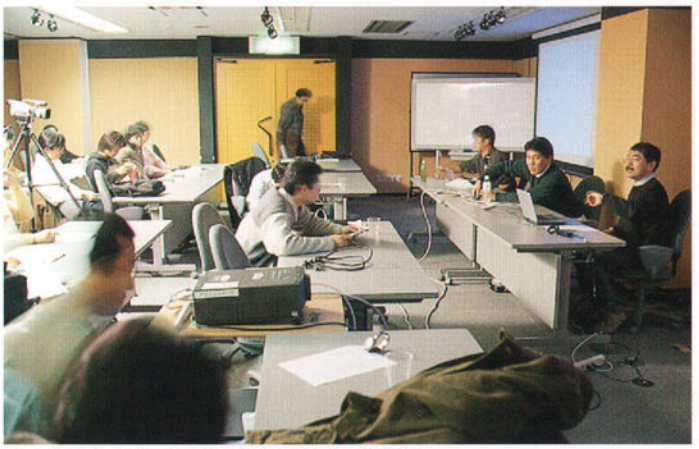
ちょうどこのころ、共同研究をしていた国立民族学博物館の杉田繁治先生から、民博もメンバーになって総合研究大学院大学ができると聞き、行ってみることにしました。

杉田先生は「コンピュータ民族学」という分野を開拓した人です。民族学者が集めてきたデータをコンピュータで整理することによって、新しい視点が生まれる、と提唱していました。私も骨のデータ処理にコンピュータを使っていたので、このやり方で人口集団を研究しようと考えたのです。

総研大では大きく分けて2つの研究をしました。1つは文化人類学者が集めてきたデータを使い、異なる文化間の類似性を統計的に分析する研究です。もう1つは、コンピュータの中に仮想の人口集団を作って、文化人類学で知られている婚姻のルールをあてはめ、人口の変動を探るシミュレーション研究でした。

文化人類学者の記述によると、母親の兄弟姉妹の子供とは結婚できないといった厳密な規則をもつ集団があります。ところが、このような厳密な規則をもっていると、よほど集団が大きくないかぎり、数百年で絶滅してしまう。

人類学者がフィールドでみているのは、せいぜい10年から20年であることを考えると、こういった婚姻の規則は固定したものではなくて、数百年単位でみると変動している可能性がみえてきたわけです。


Linuxセミナーでレクチャーする小島さん（右端）。

フリーソフトを研究対象に

研究にUNIX系のワークステーションを使っているうちに、そのツールであるフリーソフトウェアの作者が気になりはじめました。

たとえば、アメリカでフリーソフトウェア財団を主宰するリチャード・ストールマンという人がいます。「フリーソフトウェア」という概念を提唱し、改造や再配布が可能なソフトウェアだけでUNIX互換のOS環境を作る壮大なプロジェクト「GNU」を展開しています。

財団は1980年代からさまざまなフリーソフトウェアをリリースしてきましたが、それが市販のものより使いやすかった。ソースコード（注2）は全部公開され、自分用にカスタマイズすることもできる。

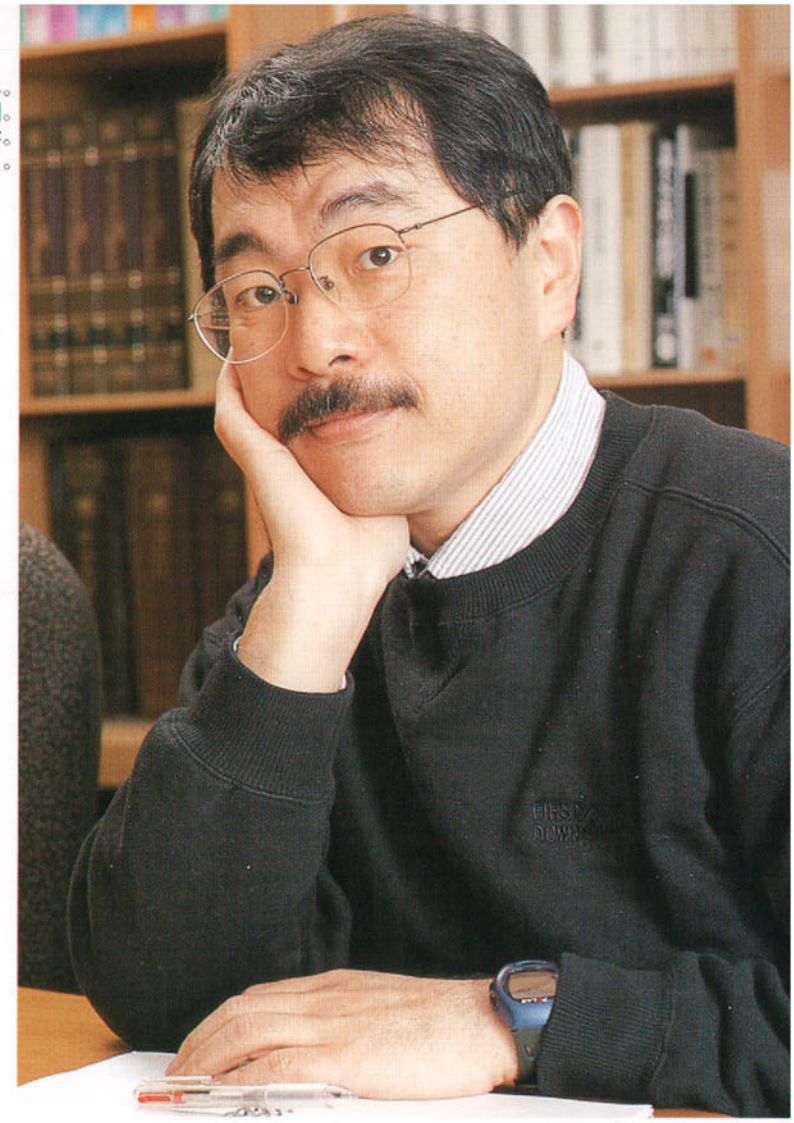
なぜ、彼らはこんな便利なソフトウェアを無料で書いて、公開しているのか。資本主義の原理から考えるとちょっとおかしいですよね。その疑問が膨らんで、フリーソフトウェアを書いている人たちの生態や考え方を、文化人類学的に研究してみようと思いついたのです。

リーナスとの出会い

研究の手始めとして、ストールマンが94年に来日したときにインタビューしてみました。彼はいってみれば思想家です。70年代に彼がマサチューセッツ工科大学で研究していたころは、ハードウェアが高価で、ソフトはおまけのようなものでした。ところが80年代に入ってソフトウェアが商売になるとわかったら、メーカーはソースコードの公開をやめてしまった。ソースコードをシェアして、おたがいの努力を分かちあい、みんなでハッピーになるという世界が崩れてしまった。

ストールマンはそれが気に食わなかった。だから、ソースコードは自由であるべきだという

1962年神戸市生まれ。
博士論文のテーマは「数学的手法を用いた文化分析の方法について」。
現在、テンアートニ社主幹。
一般向けにボランティアで実施しているLinuxセミナーは40回を数える。



（注1）　専門家がいう「ハッカー」とは、コンピュータやプログラムの細部にまで「神のごとく」精通している人のこと。
（注2）　コンピュータのプログラムを人間が読める形式で記述したもの。
（注3）　日本語Linuxディストリビューションの1つ。ディストリビューションとはカーネルとそれ以外のプログラムを組み合わせたシステム一式。Plamoは「プラモデル」のイメージに基づいて命名された。

主張に基づいて、プロジェクトを進めているのです。

同じフリーソフトウェアの世界でもう1人気になっていたのが、Linuxの開発者であるリーナス・トーバルズです。GNUのおかげでUNIX互換のフリーな環境は90%までできましたが、カーネルと呼ばれるOSの核になる部分がなかった。そこへ90年代になってリーナスが現れ、当時売り出されたIBMのPC上で動くUNIX互換のカーネルを1人で作り上げてしまったのです。

94年にドイツで開かれた国際会議に出席した帰り道に、フィンランドに寄ってヘルシンキ大学の学生だったリーナスに会いました。自宅に招かれて夕食もごちそうになりました。このときに、熱心に活動している動機はなんなのか、たずねてみました。彼は「面白い仕事だし、それを使って喜んでくれる人がいるからだよ」と言っていました。

この答えはぴんとこなかったのですが、彼の人柄に引かれて、ぜひ盛り立ててやりたい、という気になりました。何とか日本にも広めたいと考えたのですが、当時はまだ、Linuxで日本語を使うには、英語版をインストールしてから日本語化されたソフトを入れるという手間がかかりました。

それなら、あらかじめ日本語のソフトに入れかえておけば、簡単に日本語のLinux環境ができる、と考えて作ったのが、Plamo Linux（注3）でした。

開発は夜中に

開発を始めたのは96年の夏、電力中央研究所にいたころです。特段のノウハウはなく、自分にとって便利なものは、人にとっても便利だろうという考えで作りました。基本的にボランティアです。実際に作ってみると、「助かりました」とか「便利に使えています」といったメールをいただくようになり、リーナスの気持ちがわかるようになりました。

励みになるのは、自分でも予想しなかった使い方をしてもらえることです。たとえば、Windowsだと画面が見えないと操作できませんが、Plamoだと点字ターミナルで使うこともできるので、視覚障害者の方にも使っていただいています。

当時は、日中は原子力発電所のヒューマンエラー防止の研究をして、家に帰ると午前2時過ぎまでPlamoの開発をする、という毎日でした。2000年秋に電中研をやめて、Linuxのパイオニアの人たちが始めたサーバーを開発する会社に入りました。夜更かしするのが辛くなったからですが、コンピュータの世界で自分の実力がどこまで通じるか、やってみたいということもありました。今年の1月にこの会社が吸収合併されて新しい会社になりました。今はコンサルタントもしています。

これから

実を言えば、Plamoの開発を始めたときには、こういうプロジェクトを立てれば、フリーソフトウェアを書く人たちの生態を調べる手がかりになるだろうと考えていました。ところが、Linuxそのものの仕事が忙しくなってしまい、文化や生態の話は中断したままです。「ミイラ取りがミイラになってしまった」というわけです。

最近では商用のLinuxが普及して、誰でも使えるようになった一方で、ほんとうの面白さに気づいていない人が増えている気がします。Linuxの面白さは、自分の環境は自分で作る、自分が使う道具は自分で作る、という部分です。すべてWindowsのようになってしまうと面白くありません。

これからは、昔ながらのLinuxの楽しさを宣伝し、伝える活動もしてみたい、と考えているところです。

（インタビュー：青野由利　写真：由利修一）